

<まずは、中国史のお勉強>

ストーリーは壮大なものだ。時代は17世紀前半。中国大陸は明帝国の支配が弱まり、満州から勢力を伸ばした清が台頭し、各地で明の軍隊は清の軍門に下っていた。その帰順を示すスタイルが「弁髪」だ。1644年北京が陥落し、明王朝は滅んだが、一部の明王朝の遺臣たちは「抗清復明」のスローガンの下に、頑強な抵抗を続けた。福建省の長官鄭芝龍の下へ合流しようと、数名の供の者を従えて馬を走らせている鄭芝龍の息子、鄭成功もその一人だ。

<中国の福建省は何で有名？>

中国の福建省といえば、今日本では評判が悪い。なぜなら、日本で問題となっている中国人犯罪で「活躍」しているのは福建省出身の中国人が多いからだ。それはなぜか？中国の福建省は中国本土の最も南部にあって、東シナ海に面し、台湾をすぐ目の前においている。従って、気候が温暖で、昔から海上交易が盛んとなり、船を操って至るところと貿易をし、富を蓄えてきたという歴史があるからだ。その昔は、東シナ海は自分のプールみたいなもので、台湾は自分たちと一体の領土という感覚だったはずだ。今福建省では厦門（アモイ）が一番有名な都市だ。

<続いて、ヨーロッパ史のお勉強も>

この時代ヨーロッパではオランダがトップ国。イギリスの台頭はしばらく後のことだ。海軍国オランダは、近代化のトップを切って海軍力と海上貿易を一体とした世界支配を強めて東進し、ついに台湾をその支配下においていた。つまり明王朝からその領土である台湾を軍事力で奪いとったわけだ。その約200年後の19世紀末には、没落する清王朝からヨーロッパ列強やロシア・日本が我先にと、上海・北京・青島・天津・大連などを租借地と称して奪い、占領したのと同じことが、17世紀前半に実行されていたわけだ。

<「抗清復明」そして「台湾解放」>

「抗清復明」のスローガンを掲げて闘うのは、我らが若きヒーロー、鄭成功（テイ・セイコウ）（趙文卓）。彼は明帝国の時の皇帝、朱聿鍵（隆武帝）から、皇帝と同じ称号を意味する「朱」の称号を授けられ、以来「国姓爺（こくせんや）（皇帝の姓を名乗るべき偉人という意味）」と呼ばれた。鄭成功は皇帝に忠誠を誓い、明の復興と台湾の解放を悲願として闘い抜くことを決意した。

鄭成功の父、鄭芝龍（テイ・シリユー）（杜志国）は、元々は東シナ海を舞台として鳴らした、いわば海賊軍団のボス。一時は日本の海域まで勢力を広げ、長崎の平戸で日本人女性との間に男児をもうけた。その日本人妻、田川マツを演じるのは、何とあの島田楊子だ。

今はかなりオバサンになってしまったが、デビューは1971年のTVドラマ「続・氷点」のヒロイン役。そして1979年アメリカNBCのTVドラマ「将軍」に出演してブレイクし、アメリカで最も有名な日本人女優となったあの国際女優。流暢に中国語を操るのはさすがプロ！

元海賊の鄭芝龍はその後メキメキと力をつけて重宝され、今や福建省の長官となり、朱帝の信用は厚い。しかし清帝国の侵攻の前に、明帝国の命運は尽きたと判断した彼は、清帝国の帰順の誘いによってしまう。つまり父と子は悩み抜いた挙げ句、対立する立場となってしまうわけだ。清帝国は、帰順した鄭芝龍に対し、帰順の条件としていた福建省と広東省の長官に任命するとの約束を簡単に反故にし、彼を幽閉してしまった。そして圧倒的な軍事力で福建省を攻撃。必死の抵抗もむなしく国姓爺は敗退し、母を失った。そして以後廈門（アモイ）と金門を本拠地として「臥薪嘗胆」の辛苦をなめながら軍事力をたくわえて、台湾の解放を目指した。

そして10数年後、万全の守りを固める台湾のオランダ軍に対し、国姓爺は年に2度出現するという大潮を利用して、200隻の大船団で総攻撃をかけ、遂に台湾を解放した。時に1661年。そして国姓爺は、翌1662年病没した。

<戦闘シーンの面白さ>

前半、国姓爺の福建省の城が、清の圧倒的な軍事力の前に打ち破られるシーンは意外とシンプルで、「アレこんな程度か」と思ってしまった。しかしそれは、前半のちょっとした見せ場にすぎなかった。後半のハイライトである大船団による台湾攻撃の戦闘シーンは迫力がある大スペクタクルだ。そのうえ、この時代の戦闘のスタイルがよく分かってすごく面白い。中国人が台湾を解放するためオランダと闘い、死闘の末にこれを奪い返したというストーリーは、ヨーロッパに負け続けてきたアジアにとっては前代未聞のことだ。だからこそ、この「国姓爺合戦」のストーリーが日本で浄瑠璃となり、日本で上演されたときに、このストーリーを語り聞いていた当時の日本人たちに熱狂的に受け入れられたのもわかるというものだ。

<注目度超A級の美人女優を発見！>

私がこの作品で注目した点はもう一つある。それは例によって一人の女優、すなわち施良を演ずる蔣勤勤（ジアン・チンチン）だ。国姓爺の母、田川マツは日本の平戸から福建省へ船で戻る途中、漂流し死にかけていた数人の人物を救った。施良はその中の一人で、彼女は台湾人。彼女の父母は台湾に侵攻してくるオランダ軍と闘って死亡した。彼女が父母のことを思って切々と歌いあげる歌声は国姓爺の母の胸を打ち、涙を誘った。そして施良は鄭家の養女となった。つまり国姓爺の義理の妹になったわけだ。

蔣勤勤は、1974年生まれの新入女優とのことだが、私の大好きなタイプ。若き日の

オードリー・ヘップバーンの再来かと思うほど、とにかく可愛くて魅力的。おすすめ度N
O1の女優だ。この映画では、この施良がいつも節目で重要な役割を果たしており、単なる美人女優の「お飾り」でないところがまたとてもいい。最初に登場するズブ濡れの姿から、台湾攻撃で果たす重要な役割まで、この映画の中で彼女のもつウエイトは非常に大きい。汚れ役から殺陣回しそして入浴シーンでのヌードのサービスまでついて、実に魅力的にその役をこなしている。

わざわざ寒空をついて自転車で出かけていった甲斐があったというものだ。とにかく充実した2時間だった。

2002（平成14）年12月4日記